

天理参考館創立90周年特別展「スポーツの歴史と文化」は、新型コロナウイルス感染症流行に伴い、紆余曲折を経ながらも無事閉幕を迎えることができた。今回で「走る」についての一考を終えたい。

思えば、現代は「走る」ことが社会に広く受け入れられている。一昔前までは決してそうではなかった。古来、人が「走る」のは出会いや別れの局面で、急がなくてはならないとき、それも生命の危険が迫ったときに限られていた。そこには普通でない、常ならぬ事態が発生している。武士は刀を佩することもあって、通常走ることは厳に戒められていた。社会的に「走る」ことをよしとする文化ではなかったのである。確かに前回までに述べたように、古代オリンピックで勇士が疾走することは神を喜ばせたとし、マラトンの戦いで勝利の吉報は兵士の激走でもたらされた。しかし、『国家』の中でプラトンは、有名なたいまつ競走の記述の後で、通りを急ぐ知人を見つけたときに召使いを走らせて呼び止めさせている。主人つまり自由市民は走らないのである。彼らはスタディオンでは走るが、日常では走らない。そして勝利の吉報を告げた兵士は力尽きて絶命した。日本でも、曰く「事を知り世を知れば、願はず、走らず、ただしずかなることを望とし、うれへ無きを楽しみとす」(『方丈記』)。名利に走れば加速し、極まれば疲れて倒れる。心穏やかに過ごせば憂いもないということか。

古典文学に登場する人びとは、現代人のようにスポーツとして「走る」ことはありえない。特別な芸能や戦など非日常的な場面で起こる特殊ケースである。スポーツとも言える蹴鞠でも、走って鞠を蹴るのは好ましくない。鞠の動きを注視して、落下するであろう場所を推測して予め移動しておくのが良しとされた。バタバタと袖を振って走り込んで蹴るなど「品無きさま(下品)」であった。『源氏物語』の研究者によると、紫の上の登場、光源氏との出会いが鮮烈だそうだ。「中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの、なえたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり」(若紫)。貴族の姫君が十歳にもなって走ることはあり得ず、それだけに紫の上の特別性を際立たせているというのだ。光源氏はこれを不快に思わず、その後少女を深く心に留めることになる。「走る」女性といえば、日本では、黄泉の国でイザナギを追いかけるイザナミや、安珍を追って遂には大蛇に化身する清姫など、恐ろしげな事例が想起される。もっともそれらは不実な男性の行為に起因するものだが。一方、郷土玩具に見られる「牛に引かれて善光寺参り」の信心深い逸話もある。信濃に住む七十歳あまりの無信仰な老女が晒していた布を牛に奪われ、逃げる牛を追いかけたところ善光寺にたどりつき、以後は心を入れ替えて参詣するようになったという『今昔物語集』の中国の逸話に遡る言い伝えだ。これは俗世の無信心な老女ではなくなり、仏道に精進する善人への変身を「走る」行為で表している。ゆったり歩くのでは成し得ず、「走る」ことでそれまでの自分と縁を切ったのだ。館蔵品にある郷土玩具は頭に白い筋を描いた車付きの牛の張子玩

具で、人びとは老女は登場せずともこの故事を想像できたにちがいない。

海外の「走る」女性は一層逞しく、アポロドスの『ギリシア神話』に登場するアタランテーの配偶者を選ぶ方法がランニングである。求婚者たちをまず走らせ、自分は武装して後から走る。追いつかれた求婚者はその場で殺され、追いつかれなかった男性と結婚したという。なんとも凄まじいが、頑強な子孫を残す意図が垣間見える。

頑健さと「走る」の関連を示す例として、これは男性にまつわる資料だが、最後に館蔵品を紹介する。台湾先住民族パゼツへの人びとは、米の収穫を終える頃、祖先の靈魂を祭る儀式を行う。実りの収穫も狩りの収穫も、祖霊の加護によるものと感謝を捧げるのである。18世紀以降、清朝の支配を受け入れて平野の開拓に心血を注いだが、それは古来鹿追で鍛えられた健脚の賜物であったろう。収穫を終え、狩猟生活に入る節目に催される祖霊祭では健脚を競う「走鏢」を行う。3、5、7人などの奇数人数を一組として8kmから12kmを競走する。ゴール地点には優勝旗(図1)を掲げ、栄えある勝者に授与された。日本統治時代に一旦廃れるが、1990年代以降の文化復興運動の高まりで復活し、農曆の11月の新年を迎える今頃に毎年開催されている。

世界の民族文化では「走る」こと一つをとっても多様な様相を呈する。時間に追われて日常的に「走る」現代人ではあるが、ランニングは楽しみ

の範囲にとどめ、心穏やかに過ごしたいものである。100年後(いや10年後だろうか)にはAIの働きによって人びとは身体を動かすことさえなくなり、「100年(10年)前はなんとバタバタと走り回っていたことか」と評価されるのだろうか。

(図は天理参考館蔵品)



図1 伝統的競走競技「走鏢」の優勝旗「冠軍旗」
台湾 20世紀 長108.0cm